

図書館は未知との遭遇の場

経済学部長 小 柳 治 宣 (教授 社会保障論)

図書館は発見の場であり、未知の本や作者との出会いの場でもある。図書館の本当の面白さや楽しさは、必要な本や資料を捜しに行ったときにはなく、何気なくぶらぶらしているときにこそ味わえるものだ。ふだんはほとんど手に取ったことのないようなジャンルの本の並んだ棚から、適当に一冊抜き取り、ともかく最初の一頁目を読んでみる。あるいは、目次にざっと目を通して興味のもてそうなところを開いてみる。つまらなかったら、そのまま本を閉じて元の棚に戻せばいい。本を開いたら最初の頁から最後まできちんと読まなくてはいけないなどと考えてはいけない。本は途中で放り出しても、気の向いたところだけ読んでもいいのである。まずは本に触れることが大切なのだ。

だが、こうした本との接し方が時として思わぬ発見をさせてくれたりする。「当たり」の本に出会ったとき、そこには未知の世界が広がっているはずである。

私も学生のころ、そうした未知との遭遇をくり返しながらか、知識の幅を拡げていったものだ。たとえば、哲学書との遭遇もその一つであった。西田幾多郎や田辺元あるいはヘーゲルやカント、ニーチェの著作や彼らについて書かれた哲学の入門書がそれにあたる。もちろん、当時の私には読んでも、初めて目にする哲学用語が多い上に、文章そのものも難解きわまりなく、理解することは不可能に近かった。まるで日本語で書かれていながら、外国語を読んでいるような気分させられたりもした。

だが、分からないながらもそうした本に自ら触れることで自分が大学生になったのだという自覚を持つことができた。一段高い学問の世界に足を踏み入れたような、そんな優越感にも浸ることができた。諸君は、これまでにそんな気分を味わったことがあるだろうか？ 試みに、西田幾多郎の『善の研究』(岩波文庫)の冒頭部分を引用してみよう。

く経験するというのは事実^{そのまま}其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹^{ごう}というのは、普通に経験といっている者もその実は何らかの思想を交えているから、毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態を

いうのである。>

どうだろうか。今から百年前の明治四十四年に出版された哲学書の世界は、まさしく未知との遭遇だったのではなかったろうか。さっぱり分からなくてもそれでいいのである。こういう学問の世界があり、この訳の分からないように思える『善の研究』が、岩波文庫に入ってからこの半世紀の間に百刷近く版を重ねている隠れたベストセラーであることを知ることこそが大切なのである。それが積み重なってやがて教養という実を結ぶのだ。

さて、図書館で味わえるもう一つの楽しみは、自分では体験できそうもない未知の人生を本を通じて体感できるということである。様々な伝記や自叙伝との出会いがそれに当たる。そこでの出会いは、ひょっとすると諸君のこれからの生き方に大きな影響を及ぼす可能性すら秘めているのだ。私も、福沢諭吉の『福翁自伝』（岩波文庫）や杉田玄白の『蘭学事始』（岩波文庫）、あるいはトロイの遺跡を独学で発見したシュリーマンの自伝『古代への情熱』（岩波文庫）に出会ったことが、研究者の道を進む上で大きな糧^{かて}となってきた。この三冊は、今でも研究に行き詰まると手に取って拾い読みをしたりしている。

今思い返してみると、大学時代に図書館で出会った多くの本が、その後の私の人生を決定づけたと言ってもいいほどである。もちろん、こうした読むのにちょっと手間取る本ばかりでなく、小説もたくさん読んだ。それらは、大学近くの古本屋で安く手に入れたものが大半だ。本は読めば読んだだけ無形の財産となる。私は今、文芸評論家という肩書ももっているが、その元になっているのは、大学時代に寝食を忘れて読んだ一千冊近い本である。諸君もぜひ図書館でも本屋でもいいので、多くの本と出会って欲しい。

